

研究会参加メンバー所感

アダプト・プログラム研究会に参加しての所感

1. 感じたこと

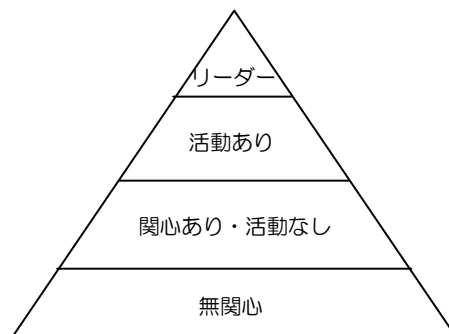
- ・すごいメンバー！すごい会！立場の異なる人が食環協さんの企画・支援のおかげで"つながってる"を実感。とにかく、メンバーに会えるのが楽しみ。お声かけいただいたことと、交通費をご負担いただいている食環協さんに、ただただ感謝！
- ・最初は、各自治体が延々と制度紹介するにとどまり、私たち行政職員のレベルの低さを痛感。業務として参加できるほどの目的や意欲に疑問アリ。河井先生の登場で、一気にレベルUP！食環協さんのマネジメントに感謝！
- ・それでも、今のメンバー（職種）ではチカラ不足。デザイン力（見せ方のプロ）が必要では…？

2. 気付いたこと

- ・誰もが、将来イメージ（ビジョン？）を持てていなかったということ。
Ex. どんな将来像のためのアダプト活動？「公共空間のあり方」の明確なビジョンは？
- ・評価、フィードバック、ビジョンや将来像の時点修正への意識が全く欠如していたこと。
- ・「地域再生」を目標とするためには、「地域（町会・自治会）」をもっと意識する必要があったということ。

3. 今後研究会で検討してみたいこと

- ・みんながトクする仕組みを実際に動かしていきたい。行動するとトクするしくみ・行動しないとソンするしくみ。トクの指標は"HAPPINESS!?"
Ex. 下記アイデアメモとか…研究会途中でメモったものです。
- ・アダプトのブランディング／日本のアダプトの将来ビジョンをつくりたい。
Ex. 「アダプト・大国・日本！」みたいな。
- ・デザインのチカラを借りて、一般人にちゃんと伝わるものをつくりたい。
Ex. 意識がどこの位置にいるどの人に伝えたいのか、若者をターゲットにした"アメンバー戦略"…などなど戦略必須。



- ・特定の個人（活動者・行政担当共に）に頼らないしくみづくり
- ・各々の立場の目的はバラバラ。共通するのはわずかな部分。これを踏まえて、どう打ち出すか…。（イメージ1）
- ・「つながれば全て解決」を、どう伝えるか？（イメージ2）

4. 研究会で学んだこと

- ・企業の CSR やマーケティングの考え方
マーケティング、誰をターゲットにするか等、当たり前のことなのに、意識できていなかったことに反省。

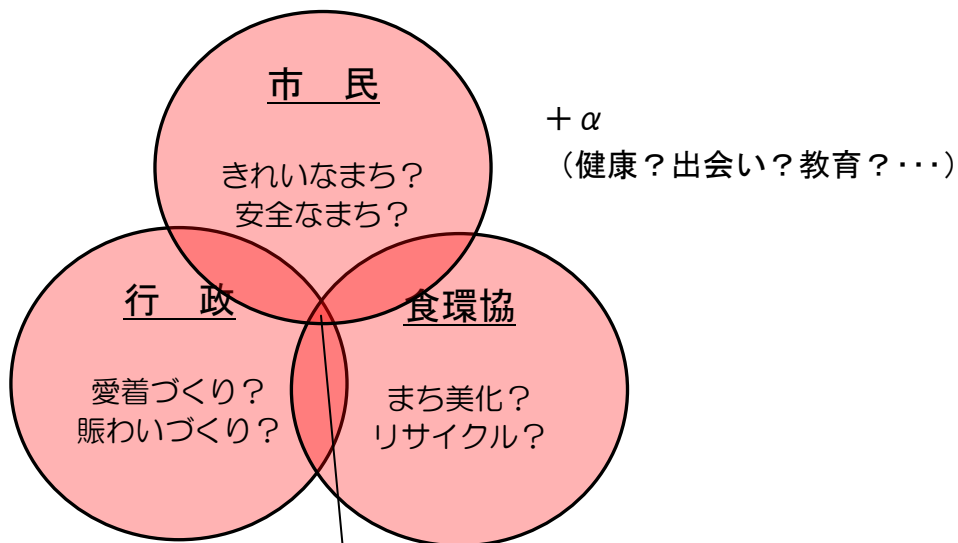
5. 今後生かしていきたいこと

- ・メンバーのネットワーク
食環協さんを介することを条件としない、会を超えたつながりの持続。
ゆるやかなネットワークづくり。メーリングリストの活用。…全国に助けてくれる人がいるのは、とっても心強いです！

◆アイデアメモ

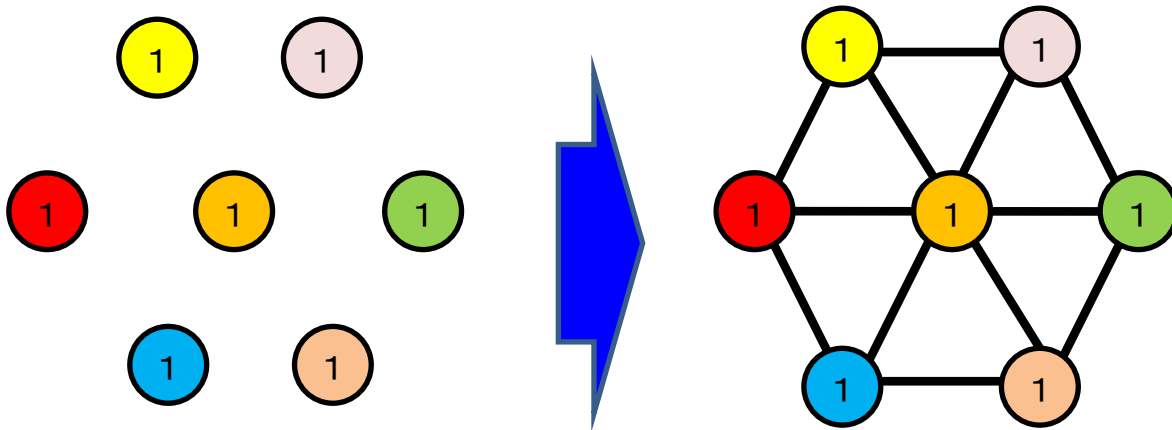
- ・アダプト助成金
活動団体からの応募を受け付け。素晴らしい活動には助成金。
- ・アダプトかけこみ寺／マイスター制度
全国の行政担当者・市民・企業等からの HELP を研究会メンバーが助ける仕組み。
- ・アダプトマーク／アダプトポイント
ベルマークのイメージ。飲料パッケージについているリサイクルマークにポイントを付加。集めれば、清掃道具や花苗と交換。⇒アダプト植樹等
- ・アダプト全国行脚
研究会メンバーの自治体から連携イベントをひとつずつ抽出。一連イベントとして、同コンセプトを掲げて研究会として乗り込み、アダプトの普及活動。
- ・アダプトウォーキング…全国名所や歴史街道めぐり。
掃除しながら、ウォーキングラリー。観光協会&電鉄タイアップ。
- ・アダプト賞
小学生だけじゃなく、オトナの目標／モチベーション UP に。
- ・アダプト担当者（行政職員）を HAPPY にする企画
アダプト活動者からのニーズの受け皿づくり。助成金制度、情報誌、ブログ等々。
あるいは、「敵は身近にアリ。」…行政内部の打破ツールが実は最も HAPPY だったり。
- ・全国統一アダプトロゴマーク かっこいいやつ！
- ・全国統一アダプトユニホーム かっこいいやつ！…企業 PR デザインで資金確保。
- ・全国統一アダプトテーマソング "ありがとう"とか"HAPPY"を感じる曲で！

(イメージ1) 「WINWIN (目的の共通点) 探し」



3者の目的の共通点は限りなく少ないのかも?

(イメージ2) 「つながれば全て解決」



$1 + 1 =$



バラバラの課題

連携すれば全て解決

「アダプト・プログラムって意外と優れた仕組みかも」

意外とというとは不謹慎かもしれませんが、アダプト・プログラム（以下 AP と略）って意外と優れた仕組みかもって感じ始めました。AP を担当することになった当初は、自分の身の回りの地域を自分たちがきれいにするのは当たり前で、行政が AP、AP と言って、そうした活動を持ち上げるのはどうなのよって正直思っていました。ところが、数年間 AP を担当し様々な活動団体と会話をし、AP 研究会に参加させていただいて多都市の取り組みを知るにつれて、AP には多様な効用があることがわかってきました。

1 環境美化

AP が導入された場所では、年に数回でも清掃活動を行うわけですから、やらない場所よりは必ずきれいになります。食環境のアンケート調査によると多くの自治体で環境美化に効果があるとされているし、岡山市のようなゆるやかな AP 制度であっても、調査したわけではないですが印象として AP が導入された場所は比較的きれいに保たれています。

また、団体が清掃活動を行うことで、それを目にする住民、あるいはごみを捨てる不届きな人に対して啓発効果があると考えられます。啓発という意味では、AP のサインやお揃いのユニフォームなどは効果的かも知れませんね。

それから、清掃活動を行うとその場所に愛着が沸くということでしょうか。「このまえ掃除したばあなのに、またごみが捨てられとって、気になるけえ拾うて帰ったわあ。」という具合に、その場所を気にかけるようになります。この効用こそ AP=養子縁組制度のもともとの意義と考えられます。

2 環境活動のきっかけ

環境保全課で AP を導入している岡山市は、AP は環境活動のきっかけで、AP を通じて様々な環境問題に関心を持ち行動できる人を育てることを目的としています。何か環境のために活動をしたと思った時に、道路の清掃活動などは簡単に始められるわけですからきっかけとしては良いですね。ただ、AP のうまい点は、合意書を結ぶということ。ゆるやかな取り組みであっても、活動団体と行政が合意書を交わすことで、活動団体に責任感が生まれ、活動の継続性がある程度保障されます。

近年の環境意識の高まりから、全国的に若者や企業の参加が増えてきています。若者や企業の環境活動のきっかけとして、敷居があまり高くなく気軽に参加できる AP は、その受け皿としてうまく機能しているのではないのでしょうか。

課題は、きっかけで参加した人を育てていくこと。岡山市の AP の本来のねらいですがうまくできていません。清掃活動を主活動にする団体に加え、地球温暖化防止、自然保護、リサイクル、ESD（持続可能な開発のための教育）などの団体と合同で交流会を開いたり、ニュースレターで様々な環境問題の話題提供を行っていますが、なかなかうまくいかないのが現状です。

3 コミュニケーションの形成

AP はコミュニケーションの形成や街づくりに繋がる。AP は市民と行政による協働のまちづくりのツール。AP 研究会に参加して、一番勉強になったのはこの効用です。AP を市民部局で導入している自治体にとっては当たり前のことかもしれませんが、環境局の私には恥ずかしながら全く欠けていた視点でした。

改めて思い返してみると、「日頃あまり顔を合わせることがないんじやが、ごみ拾いで集まって一緒に汗を流すと、会話が弾みなかなかおもしろかった」といった声は時々聞いていました。今、特に都市部では、いわゆる自治会等の地縁組織がだんだんと失われ、住民の孤立化が進んでいます。こうした中、AP で清掃活動する時だけでも皆が顔を合わせることは、意外と大事なことであり、AP は地域コミュニティの再構築のツールとしてうまく使えるのではと考えるようになりました。

また、研究会で話題提供させていただきましたが、地域外の若者が AP 活動をすることで、その地域に住んでいる町内会の方々が、若者と一緒になって清掃活動をするようになり、若者と町内会の交流が生まれました。AP には自治会等の地縁団体以外にも、NPO やサークルなどの目的団体も参加していますが、目的団体の中ではもちろん会話や交流が生まれるでしょうし、前述の事例のように、地縁団体と目的団体の交流が生まれる可能性もあります。

このように AP にはいろんな展開が期待されることがわかり、AP って優れた仕組みかもって感じ始めたわけです。

地縁組織が失われていく中で、「このままではいけん、なんとかせにゃあ」と行動をはじめの人々や、「環境のために私にも何かできることをしたい！」と環境活動をはじめの人々がいます。行政は、お役所仕事とか縦割り行政などと悪く言われることもありますが、一方で信頼してくれています。急に訪ねて行っても「市役所の〇〇です」と名乗ればドアは開けてくれますから。民間ではこうはいきません。

このように信用され信頼されている行政の役割は、ずばりコーディネーター。行政は、立ち上がった人々を大切に、そうした行動の芽を持続可能なかたちで大事に育てていくコーディネート力が今一番求められているのではないかと思います。

「アダプト・プログラム研究会に参加しての所感」

私は、5年前に初めて「アダプト・プログラム」を知りました。

なぜと言うと、市長マニフェストの中で、「アダプト・プログラム導入」との項目があり、急遽担当として事務分掌があったからです。

最初は、「アダプト」って、和訳すれば里親？さて何をするのかと、日々調査することが仕事でした。

県や近隣の市町に問い合わせても、「アダプト事業はやっていない」「アダプトは難しいので名前だけは知っている」「アダプトシステムは行政に馴染まない」などネガティブな意見ばかり返ってきました。

偶然、インターネットで「アダプト・プログラム」と検索したところ、(社)食品容器環境美化協会 聞きなれないページへアクセスしました。ページの中身を閲覧すると、私が知りたかった情報が沢山掲載されており、早速電話して問い合わせたことが、つい最近のように思い出します。

アダプト・プログラムは日本に導入され、約10年が経過し、事業が停滞していることがわかりました。まず、欠点を洗い出しました。なぜ、市民はアダプト活動をしなのか？本当に必要な活動なら行うはずではないかと考えました。従来型のゴミ拾いや花壇管理といったアダプトモデル事業からオリジナルのアダプトメニューを考案し、市民が必要な活動なら行うはずと考えました。

まずは、私自身がアダプト・プログラムを説明して廻り、活動を行う際には一緒に活動するスタイルを取り、顔と顔の見える関係づくりを心がけ活動しました。

結果として、様々な活動が展開されたと同時に、市民要望から生まれたメニューも沢山誕生しました。本市では、新たな地域づくりのモデル事業としてアダプト・プログラムが市民に浸透し始めてきています。

現在では、市民10人に1人がアダプト活動に参加しています。

アダプト研究会に参加してですが、08年にアダプト・プログラムシンポジウムにて先進事例紹介として登壇させていただいたことがきっかけで、昨年度からメンバーとして活動参加しています。

北は北海道 札幌市、南は九州 久留米市と全国からのアダプト先進都市の担当職員が、(社)食品容器環境美化協会さんの声掛けで集まりでした。

最初はギョチナイ雰囲気での会議でしたが、アダプトの良さを知っている職員の集まりでしたので、「アダプトから地域を活性化させたい」「人と人が繋がるのが大切」「地域住民との顔が見える活動」など、公務員だけに「町のために」という熱い思いの職員の集まりでした。職員同士が刺激しあう事で、新たな発見や思考が広がり会議に出向くことが楽しく、エネルギッシュな仲間と合えることが楽しい会議でした。

(社)食品容器環境美化協会さんのご厚意とアダプト研究会の繋がりでも、今年度本市で「まち美化シンポジウム」を開催していただきました。

市民、市民活動団体、事業所及び市長以下職員みんなが、アダプト・プログラムを知

っていただく機会づくりとなりました。本当に感謝しています。

シンポジウムでは、研究会メンバーに事例報告をお願いするなどメンバー交流があった有意義な取り組みでした。

特に、今年度からは研究会座長を河井准教授をお願いすることで、意見のまとめ方や意見の引き出し方など、アダプトの持つ可能性を再発見できた研究会でした。

研究会は3年間という区切りであります。

研究会の成果を、このメンバーと共に最後まで作り上げ、アダプトの可能性を今後も研究し続けたいです。

行政だけが得られる。アダプト活動する事での、市民満足及び担当者の喜びを全国300以上のアダプト担当者へも喜びを分かち合ってもらいたいです。

最後になりますが、研究会メンバーは1つのチームです。河井教授を監督にチームメートです。

ありがとうございました。

アダプト・プログラム研究会に参加しての所感

私がアダプト・プログラム研究会を通じて最も強く感じたものは、「今後、市民協働事業は行政においてますます重要な役割を担っていく」ということです。人員上、予算上、また、行政と住民との距離を縮め、お互いにより良い関係を築いていくため、行政は住民と一緒にあって、同じ目標に向かって事業を展開していくべきだと改めて感じました。そして、その事業の一つとして、アダプト・プログラムは非常に有効なものであると思います。

アダプト・プログラム研究会では、さまざまな都道府県、市町村の方々と触れ合うことができ、アダプト・プログラムについての知識を学ばせていただきました。行政側の方々だけでなく、住民側の方々からお話を聞くことができ、アダプト・プログラムの現状や問題点等をより直接的に把握できました。ユニークな取り組みもたびたび知ることができ、アダプト・プログラムが成功するには、従来の縦割りの行政のしくみだけでなく、時としてその枠を超えて住民の方々と接していくことが必要なのだと感じました。そして、アダプト・プログラムが成功すれば、両者とも誇りを持って活動にあたり、多くの笑顔が生まれていくのだと確信もしました。

アダプト・プログラムという言葉が聞きなれないものであった1年前から、アダプト・プログラムは面白く、これから行政にとって不可欠な事業となる可能性が十分に秘められていると考えるまでに至った現在まで、この1年間で私自身とても成長できたと感じています。来年度以降も、アダプト・プログラムがより繁栄していけるように、私も尽力したいと思います。

最後に、何もわからずに右往左往していた私を温かく迎えてくださり、アダプト・プログラムの楽しさを教えてくださった河井先生や食環協の方々、アダプト・プログラム研究会の皆様感謝しつつ、来年度以降も変わらぬご指導、ご鞭撻をお願い申し上げ、私の所感を締めさせていただきます。

♪協働♪&♪協働♪

“私たちの暮らしているまちをより安全安心で住みよい素敵なまちにしたい”

こんなまちを築くため、協働のまちづくりは、みんなの共通の思いです。協働の理念は、異なる能力を持った参加者が共通の社会目的を共有し、それぞれの特性を持ち寄って対等の立場で協力してともに働くことです。このようなしくみを作ってそれが効果的に機能し、地域社会全体でうまくいくには、誰もが参加できる具体的なものとして定着させることが大事です。このとりくみが「アダプト・プログラム」！！です。

・・・とはいえ本当に思っているの？

・・・とはいえ押しつけじゃないの？

そんなことないですよ！
皆さんあってのまちづくり

★都市化の波

一隣の人は何する人ゾー

現代は、“心のふれあい”“助け合い”が薄れて地域が主体的に担ってきたまちづくりのしくみが失われつつあります。また住民ニーズやライフスタイルの多様化、複雑化が進み、行政だけではきめ細やかな社会サービスの提供に限界という状況になっています。地方分権が進展する中、地域の特性を活かしたまちづくりが必要です。これらの社会的課題やニーズに対応し解決していくしくみが“協働のまちづくり”です。

※聞いてちょ

[現場へ足を運んでこそ生まれる満足感]

まちをきれいにしたい！という同じ目的のために、地域の方々がともに行動し、共有することで連帯感や絆が深まります。汗を流して共同作業を行ったりするとお互いに結びつきが強まり深まります。私が団体さんの取材に日曜日朝6時に伺った際には、少々しんどいなと思いつつ、その場で活動と一緒にいき終了した時には、なんとも言えない満足感がありました。話しながら皆さんと行動をともにすることで、共感を覚え満足もたらし、やりがいを感じました。活動されている団体さんと会話がはずみ、私自身の生き方等のエッセンスにもなっています。人と関わることの中から生まれるいろんなこと。こんなあんばいで仕事をやりはじめてはや5年。怒られたことやトラブル三昧数々・・・でも喜ばれたことも数々・・・。

[研究会への感謝]

- ・ともに分かち合える仲間たち（だあれ？？？おばさまって言わないで）
- ・理念も大事ですが、現場も大事
- ・元気なメンバーと会話することで私のモチベーションアップ
- ・協働は“今日どう？”からはじまり～
- ・人と人のふれあいやつながりを大切にしたい

アダプトプログラム研究会に参加しての所感

- ・メンバーとの出会えたこと

→これが一番

- ・次年度のテーマが研究会にふさわしい内容（個人的に）

→どの自治体も悩んでいる（久留米市も）内容を研究し、その成果を久留米市や他の自治体に残したいです。できれば、河井先生の広報の術を学ぶという内容も盛り込んで欲しい。

- ・飲料業界の参加者や河合先生の意見をもっと伺いたい

→民間の人たちの意見が気になる（行政に対しての率直な意見）。もっとも、河井先生はコーディネーターのため、難しいですが・・・

最後に

- ・環境美化以外の点を重点に進めていること。

→久留米市では、環境美化の位置づけで事業を行っているため、管理部局（大阪府など）や協働部局（磐田市など）と研究できることは非常に意義のあることと感じた。

→久留米市では、アダプトが単なる環境美化でおさまらないことは理解もしているのですが、協働部局との連携が全く取れていない。協働部局もアダプトの良さを理解しているが、どちらも働きかけをしていない。

→大阪の営業のレベルにはびっくりした。（久留米市でも「くるめエコパートナー」という事業で事業所に協力してもらうために営業をがんばっているが、完璧に負けている）

→広島のNPOへの委託も興味があった。（市民との協働に、NPOとも協働）

次年度もよろしくお願ひします。また、研究会以外でも、いろいろとよろしくお願ひいたします。

アダプト・プログラム研究会に参加しての所感

本県において、アダプト制度を立ち上げたのが、平成12年度のこと、私が県の地方機関で初めてアダプト担当になったのが平成13年度のことでした。当時、道路・河川の維持管理を行っている職場の中では、アダプト制度といっても馴染みがなく、また、この制度のあり方に疑問を持つような職員もいました。

そのようなとき、ネームバリューのあるマツダ(株)がアダプト活動認定団体になりました。これを機会に、知名度が低いアダプト制度を大々的に広報しようと、本社社屋前にあるサインボードに関係者一同(会社・県・町)が集まって、「除幕式」を開催し、テレビ放映しました。前例のないことなのでトラブルも多々ありましたが、何としても開催に漕ぎつけようと意気込んでいた当時の頃が思い出されます。

その後、長らくアダプト制度とは離れていましたが、平成20年度から再びこの仕事に携わることになり、アダプト・プログラム研究会に参加した次第です。

この研究会に参加して、府や市、あるいは企業の皆さんの意見などを聞くにつれ、啓発を受けたり、疑問に思ったり、色々なことを考えさせられました。以下、主な感想を3点にまとめて書き述べてみます。

まず、第1点目ですが、アダプト制度の目的についてです。これまで、土木という職場柄、私としては、アダプト制度の主な目的は、事業費削減という風に思い込んでいた節があります。何しろ、奨励金の予算要求の際は、「直営で除草するよりもアダプト制度の方が安価である」という趣旨の説明資料が不可欠なのですから。しかし、地域住民の方々と日頃接している市の皆さんの意見を聞き、アダプト制度の成熟は、地域づくり・人づくりに結び付くものであって、それこそがアダプト制度の目的であるという考え方を知り得ました。また、アダプト制度の展開においては、もっと先を見据えた戦略的な意図も見受けられ、これらのことが、この研究会に参加したことの一つの収穫であろうと思っています。

次に第2点目ですが、アダプト制度の運用に当たっての、ゴミの収集・搬送などの様々な問題についてです。かつて、この研究会でも議題として取り上げられ、問題の抽出や解決策などについて議論してきました。しかし、消極的と言われるかもしれませんが、私としては、問題の解決策を模索することは大切だけれども、そもそも制度そのものが解決困難な内在的な問題、いわゆる「負の部分」を抱えているように思っています。先般、あるテレビ番組で、糖尿病患者が病気とうまく付き合いながら、前向きに生活している姿を放映していました。アダプト制度も、「負の部分」とうまく付き合いながら、(言い方を変えれば、「負の部分」の解決は半ば諦めて、)良い面に着目し、そこを大きく伸ばしていくことに力を入れる方がよいのではないかと思います。

最後に第3点目ですが、アダプト制度の今後についてです。来年度、アダプト・プログラム研究会としては、幾つもの考え方を集約しながら、ベストな制度を目指して、一つの方向性を見つけ出す作業に向かうのであらうと思われまます。しかし、私としては、アダプト制度というのは、目的にしる、形態にしる、むしろ多様性があつた方がよく、また、型にはまった制度に納まるのではなく、いつでも、他の制度や新しい考え方を受

け入れ、変化していけるような柔軟な制度であることが望ましいと思っています。各都道府県あるいは各市町村によって、斬新的な試みが連綿と実施され、それぞれ特色のあるアダプト制度が誕生していくことを期待しています。

アダプト・プログラム研究会に参加しての所感

アダプト・プログラムは、日本に導入されて日が浅く、導入自治体は増加しつつあるものの、まだ認知度は低く、制度としても成熟したものとは言えません。そうした背景の中、行政の主催で全国自治体のアダプト・プログラム担当者が集まり、情報や意見交換を行う場も設けられていないのが現状です。その意味で、研究会という先進的な取組みにおいて貴重な機会を与えていただいた食環協様に感謝を申し上げます。

この研究会に参加して、他の自治体の取組みを聞き、取組内容だけではなく、制度の視点・考え方も様々あることを知り、改めてアダプト・プログラムの多様性について考えさせられました。多様性があることはそれだけの可能性を持つことを意味しますが、反面、縦割りを原則とする行政にとっては解決すべき課題が出てきます。当県においても、市町にお願いしているごみの処分問題、道路法や河川法等の法令との関係など、認定団体が充実した活動ができるよう解決していかなければならない問題を抱えています。行政が法令に則って公平・公正に仕事をする以上、導入する自治体は共通する課題を持ちます。元来、アダプト制度のスタートは、地方の美化運動などから起こったものだと聞いております。これらの課題につきましては、地域の視点から、NPO法人や民間企業の協力も得て解決していく必要があると感じております。

当研究会に参加させていただき、いろいろと勉強させていただきました。当研究会で引き続き活発な議論が行われ、全国のアダプト・プログラムの充実・発展に資するものとなるよう期待しています。

アダプト・プログラム研究会に参加しての所感

この研究会には第1回から参加をしているが、各自治体で導入の目的等が異なり、また担当部署も様々なので、毎回違う発見があって興味深いと思っている。

食環協のアンケートを見ても分かるとおり、アダプト・プログラムを導入している自治体の担当部署は大きく、「市民系（協働系）」、「環境系」、「土木系」の3つに分けられる。札幌市中央区のアダプトは、この内では市民系に当たる。

市内に10ある行政区の1つである当区は、地域の課題である「違反広告物」の撤去を、地域住民や商店街の方々が市から委託を受けて行える仕組みとしてアダプト・プログラムを平成15年に取り入れた。それから5年間が経った平成20年、食環協から当研究会へのお誘いがあったわけである。

その時点の当区の覚書締結団体数は15程度で、1年当たりの締結数は3団体。制度の効果的なPR方法が課題であった。この研究会への誘いを機会にPRについて学びたいとも思っていたことから、早速研究会の構成自治体からニュースレターを入手させていただき、中央区版のレターの作成について検討を始めた。

実際に研究会の議論に参加してみると、当然のことだが自治体それぞれに目指す方向性が異なるので、同調できることとそうでないことがある。また、首長によって力の入り方も違うし、札幌のように全市的にはプログラムを導入していないというところもある。しかし、系統は違えど、おそらく悩みは共通であろう。ただ、解決の仕方はやはり異なるのかもしれない。その意味では自分の自治体と同系統の自治体のやり方は参考になる。しかし、他の系統の自治体の話が全くためにならないわけではない。現に、私も毎回何らかのヒントを得て帰庁している。

この研究会の成果は、構成自治体にとっては議論の中でヒントを得られること、そしてこの研究会の報告書を見た自治体の担当者にとっては、課題解決のヒントを見出し、また見出し得なくても、食環協または構成している自治体に聞けば、解決の足がかりになるのではと思ってもらえることではないだろうか。

札幌市中央区のニュースレター「中央区環境美化だより『きれいなまち、ちゅうおう』」は、平成21年10月から2カ月に1回発行している。内容は、当区のアダプト・プログラムや覚書締結団体の紹介のほか、地域の将来を担う小学生に、美化活動を通して、まちづくりや環境への関心を高めてもらおうと行っている「子どもの環境美化事業」についても掲載している。

ニュースレターを作成するに当たって、直接参考にした自治体はない。しかし、研究会で出た様々な議論の中身が、このレターの内容に大きく影響をあたえていると思う。具体的に「どこが」というのは難しいのだが。

このレターのどこかが全国の皆さんの仕事のヒントになればと思う。

アダプトプログラム研究会に参加して

平成19年4月に現所属に配属された時の一番の疑問、不思議、聞いたことのない言葉が、「アダプト?」でした。

仕事に追いかけられ駆け足で一年が過ぎた頃、かかってきた一本の電話は、食環協の宮本さんから。

☎宮本「アダプトプログラムの研究会を立ち上げたいと思っておりますが、参加していただけますか?学校アダプトの取り組みは珍しいので、皆さんに紹介していただきたいと思いますが…」

☎「そのような場でしたら、課長が参加したほうが良いと思いますので、確認とりますね。」

☎宮本「いやいやいや。私たち食環協が求めているのは担当者の意見、現場の声です。是非、参加してもらいたいです。」

☎「えええ、私が必要とされているのですか?それでは、行かせていただきます。」

☎宮本「ノウハウを教えてください。」

☎「はい。」

と元気よく返事をしたのが、研究会に参加するきっかけです。

研究会に参加して一番強く感じたのは、当市のアダプトがかわいそうだということ。まず、担当者は私一人。ここから、当市のアダプトに対する期待度が理解できると思いますが、私自身の仕事全体から見ても10%位の割合で取り組まないと、その他の業務が追い付きません。

そのくせ、様々なところでアダプトを利用しています。

まず、第3次総合振興計画、中期基本計画の中にある「環境の美化とモラルの向上」の施策の中では、とりくみ目標として、アダプトプログラムの実施団体数を掲げています。また、行財政集中改革プランの個別行動計画の取り組み項目としてもアダプトプログラムの実施団体数を位置づけています。いわば、私の課の目玉となる業務のはずなのに、あまり手をかける体制にないのです。

このような状況の自治体（一人担当の自治体）で、アダプトを推進するには、担当者のやる気しかないと思うのです。

「首長自らアダプトの推進を掲げていたら、さぞかし業務を進めやすくだらうな。」と妬みのような気持ちを持っていましたが、やっぱり何より担当者。他のメンバーの皆さん、熱い思いを胸に抱き仕事をされていて、受け身の方がいないですね。中枢の部署で、上司の期待に答えられる人は、私の何倍ものオーラを出していて、生き生きとして、カッコイイです。

宮本さん、よくぞこんなメンバー集めましたよね。
企画委員さん、事務局の方、ほとんど全ての人が、
「行政のイメージが変わりました。皆さん元気ですね。」
とビックリされます。私も、会議に出るたび、刺激を受けてます。

つぶやいたり、ぼやいたりしながら、気付きましたが、アダプトを広めるためには、
①受け身姿勢で仕事をしたい方（皆さんが描いている行政のイメージ通りの人！）に
も、受け入れられるような、簡単なお手取り方法を提示してあげること。

②アダプトが始まったら、熱い思いを胸に抱いたやる気のある職員が異動してくるの
を待つ。

③アダプトの裾野が広がる。

というプランはいかがでしょうか。真面目に本気な提案ですが、却下かな？

最後に、河井先生が参加されてから、会議にまとまりが見えてきました。松木さんの
参加で明るさも増しました。昨年度までは、宮本さん一人で、言いたい放題の行政軍団
にさぞかし手を焼いていたことと思います。

研究会への参加は勉強になると共に、メンバーとのディスカッションは私に頑張る力
を与えてくれます。

受け身姿勢で仕事をしていたら、このようなチャンスを生かせなかったと思うので、
今後もゴーゴー、前だけを見て、仕事に励みます。

ありがとうございました。

「アダプト・プログラム研究会に参加して」（所感）

今回、初めて「アダプト・プログラム研究会」に参加させていただきまして、ありがとうございました。昨年12月21日付で全く畑違いの部署から現部署に転入してきたため、大変失礼ながら当研究会のこれまでの討議・研究内容やアダプト・プログラムの実態も十分に理解・把握できていないままの参加となってしまいました。

そのような状況でしたが、特に感じたことはメンバー皆さんの環境美化に対する熱い思いでした。県や市・区と規模やロケーションが異なっていますが、皆さん熱心に好事例や課題、悩みといったものを披歴し合い、共有する姿はひじょうに印象的で、私の目には感動的にすら映りました。

私が持っていた従来（思い込み）の地方公務員のイメージとは対極にある方たちでした。きっと、環境美化という担当職務だけでなく、“地域住民の幸せへの貢献”という使命感を明確に意識しているからだろうと推察しています。

この使命感は、民間企業の考え方を積極的に理解し、取り入れようとする姿勢に如実に現れていると思います。

また、懇親会ではメンバーの皆さんが打ち解けて、仲間のように話されている情景を拝見し、まさしく同志なのだと感心しました。

行政組織のあり方のため仕方がないのかもしれませんが、“タテ・ヨコの連携”の視点がなかったように思います。環境美化事業と他事業の連携やより上位概念へのリンク、具体的には環境美化事業とゴミ処理量の削減やリサイクル事業との連携、郷土愛や地域の誇りの醸成へのリンクです。「ウチ・ソト」、「タテ・ヨコ」が“WIN-WIN”となるいろいろな連携により、相乗効果を図るという考え方も必要と感じました。以上、雑感で大変恐縮ですが、ご報告させていただきます。

食環協アダプトプログラム研究会に参加しての所感

1. 各行政の代表の方がもの凄く積極的に取り組んでいる。
2. 河井准教授のファシリテートが素晴らしく、ほぼ全員の意見を引き出している。
3. まち美化⇨アダプトと考えた場合、飲料メーカーがバックアップすべき部分とタバコとかペットの糞とか、多くの要因が重なる中で、食環協という組織の活動とバックにある清涼飲料メーカーのサポート活動というところがこの活動の中でどこまで訴えられるか、少し考慮・検討が必要かもしれない。
4. 全国一律の議論、或いは各行政単位にしても一律議論出来ない問題でないか？例えば町内会の活動がしっかり根付いているエリアとそうではないエリアとではアプローチや啓発活動には違いがあって当然だし、代表の行政単位の中の活動実態を拡大推計できるようまとめる必要がある。(あそこは特別だという議論にならないように…)
5. 地方の場合は地元メディアとの情報交換をもっと密に出来るのではないか？
6. 福岡の若者を引き付ける事例もあったが、何かのご褒美で集めるのは定着しない。大きな地震の際のボランティア活動が自然に発生するような流れをどう作れるかの検討を深める必要があるのでは？
7. 地域の趣味やコミュニティの組織を使っでのアプローチは有効と考える。
8. 早い段階で評価システムを作り上げ、同じ指標で活動が評価され、その上で表彰制度があるとより理解されやすいし、定着するのではないか？

アダプト・プログラム研究会に参加しての所感

アダプト・プログラム研究会は2008年度の新規事業として取組み、初年度は食環協事務局にて進行を行いました。しかしながら不慣れもあり、討議テーマの絞込みがうまく出来なかったこと、意見交換の中で話題を膨らませたり、発展させることが十分できなかったこと、従って目立った成果が得られなかったことが大きな反省点でした。

本年度、河井先生に座長をお願いしてから一変し、課題抽出、様々の視点からの討議が活発に行われ、メンバーにも満足いただけたと思います。この1年のご指導に深く感謝申し上げる次第です。以下、感想を列記します。

1. 得られたこと、学んだこと

①自治体調査の知見をもとにしてアジェンダを設定し討議すること

ある知見がどんなアジェンダを持つかの見極めや判断。一見小さく見える「種」が大きな問題・課題を孕む場合があること。

②意見や問題提起などの編集

- ・メンバーの意見や、言いたいことの本質が何かを的確に編集、集約されたこと。
- ・行政担当者のみでなく、企業代表としての企画委員の意見を引き出し、行政—企業の考えについて比較対照できたこと。(特に3回目)

(行政・企業の双方とも変化しているが、その変化に各々が案外気づいていない→認識を共有すれば連携の可能性が出てくる)

③解決策、解決の方向の多様性

解決策・解決の方向性の一つではなく、自治体のおかれた状況により採りうる策も異なるので、当協会としてはいくつかのパターンを例示できるよう検討したい。

2. その他

①本研究会のような自治体担当者との意見交換会は初めての試みであったが、メンバー皆様の熱い思い、パワーをいただいた。

②現メンバーを核としたネットワーク化の検討

現在の研究会メンバーを核として、いくつかの先進自治体にも呼びかけ、自由に情報交換が出来るサイトを設定を検討したい。